

岩見沢市 利根別自然休養林の森と植物

芳賀 卓

要 旨

岩見沢市街の東側には標高 100 m 内外の岩見沢丘陵がある。そこに広がる広葉樹林は、貯水池の水源涵養のため、長年にわたり樹木の伐採を免れた自然林で、そのおよそ 400 ha が利根別自然休養林に指定されている。本稿ではこの森の植生、主な樹種、低木や林床植物、林内歩道ぞいの四季の植物などについて紹介した。また、利根別自然休養林研究会のガイドブック刊行、野草やキノコの観察会、およびオオハンゴンソウ駆除などについて述べ、また、岩見沢野鳥の会と代表的な野鳥などについても触れた。今後は自然豊かなこの森全体の保全を進めるなかで、希少なハイハマボスの保護や、大正池の復原の後周辺に侵入が予想されるハリエンジュやオオハンゴンソウの防除にとくに留意しなければならない。

1 岩見沢丘陵について

筆者は、岩見沢を訪れたことのない人から、また、訪れたことのある人からでさえ、岩見沢に山林なんてあるの？ と尋ねられたことがこれまで何度かある。たしかに地図で見れば、岩見沢市街は石狩平野の東北側の平坦地に位置し、列車や車で通過しても平らなところを走った記憶しか残らないであろう。植物好きな人には、岩見沢市南西部の地名である幌向を冠した湿原植物ホロムイソウ、ホロムイツツジ、ホロムイイチゴなどの名から（川端 1962）、湿原や低地が広がるところとのイメージを持たれているかもしれない。

その幌向から北東方向を、また、上幌向や石狩平野の中の北村あたりから東側を見わたせば、岩見沢市街のかなたに夕張山地を望み、その麓に市街地に接するように横たわる低い丘陵を眺めることができる。道央自動車道を札幌方面から旭川方向へ走るなら、岩見沢インターチェンジを過ぎてまもなく、車は両側が切り通しとなっているところを通過するが、ここは岩見沢市街に向かって張り出したこの丘陵の縁を切り通したものである。

この丘陵は岩見沢丘陵と呼ばれ、北の幾春別川、南の幌向川、西の岩見沢市街を含む石狩平野、そして東の茂世丑低地によって囲まれ、南北に約 6 km、東西約 3 km の広がりがある。標高は麓部分で 50 m 内外、稜線上で 100 m から 120 m ほど、もっとも高いところで 157 m である。

丘陵は、その中ほどで東から西に流れる東利根

別川によって南北に仕切られている。この川の北側は道央自動車道が貫き、土地利用が進む一方、南側の大部分は周縁部を除き森林に被われている。

2 利根別自然休養林の歴史

なだらかで周囲を河川や平地で囲まれ、人手が入りやすい岩見沢丘陵の南半分に広く自然林が広がっていることには、それなりの歴史がある。

この森一帯は、岩見沢市民には「大正池」の名で親しまれてきた。その名のとおり、森のなかには 1914（大正 4）年に完成した貯水池大正池がある。大正池は、丘陵からの沢水を水田灌漑用水として溜めるために、沢 昇平・八郎治父子の尽力と地域の人々の協力によって造られた。これによりこの地域の水田面積は飛躍的に広がり、この地域の農家の人々は、池の運用と水源涵養のため水利組合と森林愛護組合を作り、以後 100 年にわたってこの森と池を守ってきた（岩見沢市史編纂委員会 1962）。さらに、この丘陵の森は、同様の農業用貯水池である北東部の東山池および南西部の金志池の水源ともなってきた。

1961（昭和 36）年、大正池周辺は岩見沢市が管理する東山自然公園（現在の利根別自然公園）となり、さらに 1972（昭和 47）年には丘陵の森林およそ 400 ha が林野庁により利根別自然休養林に指定された。その範囲は、中央自動車道に接する森の西縁から東へ約 2.5 km、北縁の東利根別川から南の萩の山市民スキー場およびいわみざわ公園

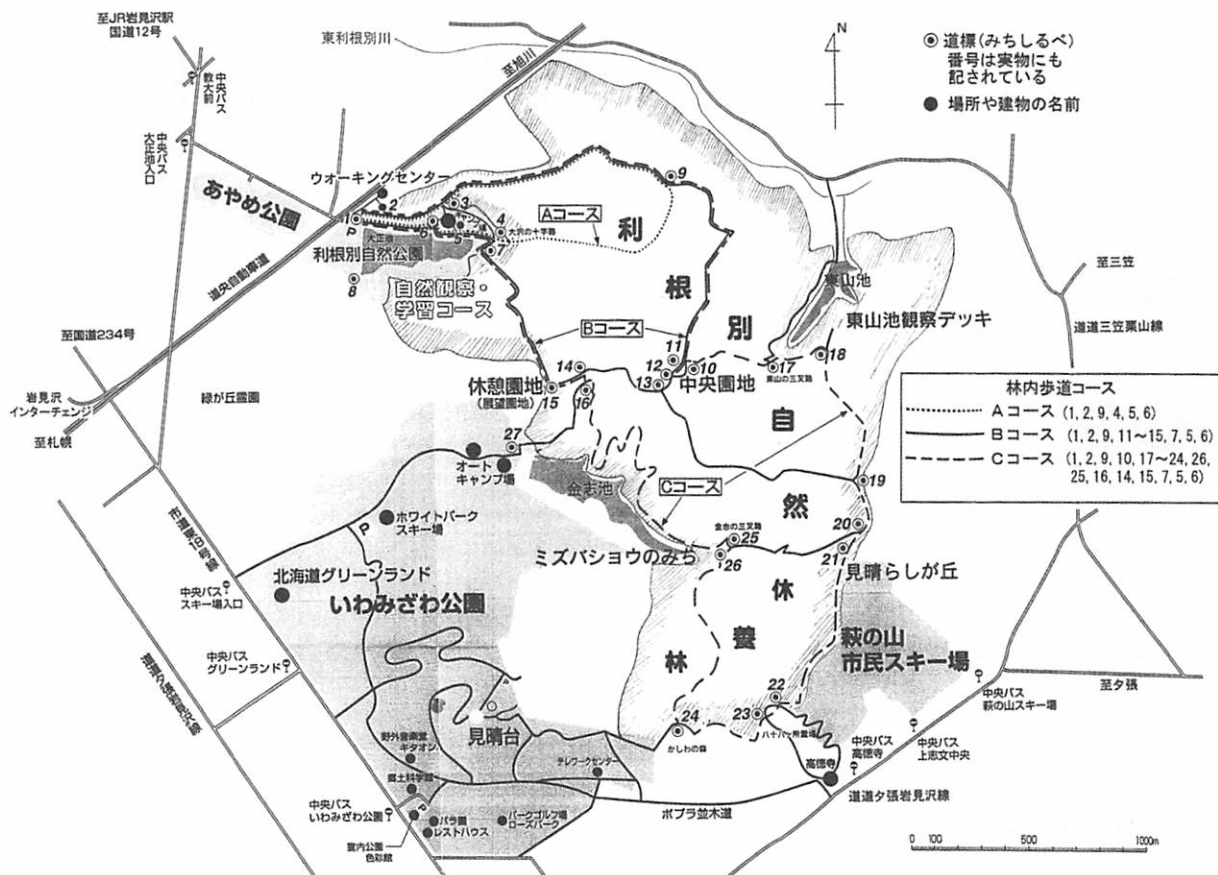


図1 利根別自然休養林と林内歩道コース

付近までの約3 kmの間にあたる(図1)。さらに、この全域は保健保安林、水源涵養保安林、鳥獣保護区に指定されている。また、これらとは別に利根別原生林との呼称もある(植物学上の原生林には合致しない)。

3 落葉広葉樹林の構成

上述のように、長く自然林の状態が保たれてきたこの森では、植生や生物相もこの地域の自然をほぼありのままに示していると思われる。種子植物相は未だ完全には明らかではないが、北本 毅氏(利根別自然休養林研究会)によればおよそ450種、また、シダ植物は少なくとも40種(利根別自然休養林研究会 2007b)が存在する。大正池周辺の落葉広葉樹林の樹種について、川端(1962)は、50種を例示しており、それらは温帯(または夏緑)広葉樹林やミズナラ・イタヤカエデ・シナノキ林(宮脇 1967, 菊沢 1986, 植村 1993)と呼ばれる自然林の構成種である。なお、部分的にトドマツなどの人工林も存在する。

大正池周辺の森でよく見られるものは、アサダ、アカイタヤ、シナノキ、ハウチワカエデ、ヤマモミジ、ミズナラなどであり、とくに優占する樹種

はない。しかし、アサダが比較的多く見られることはこの森の特徴の一つで、とくに大正池南岸の北向き斜面に多い。また、これらと共に、オオバボダイジュ、ウダイカンバ、ホオノキ、キタコブシ、イタヤカエデ、エゾヤマザクラ、シウリザクラ、アズキナシ、ハリギリ、ミズキ、イヌエンジュ、ニガキ、コシアブラ、ハクウンボクなどがあり、奥まで入れば自生と思われるトドマツも散見される。コナラは森の周縁部のほか、自然休養林の南部でいわみざわ公園に接するあたりに多く、南部にはカシワもある。林縁部にはシラカンバがふうに見られる。

林床のほとんどはクマイザサに被われる。低木には上記の樹種の幼木ないし若木があるが、アサダの若木はわずかである。このほか、エゾユズリハ、ツタウルシ、ハイイヌガヤ、ツリバナ、ノリウツギ、オオカメノキ、ハイイヌツゲなどが生育する。また、一部に限定されるが、ツルシキミ、クサギも見られる。

群集生態の観点からは、ミズナラ・フッキソウ群集ハイイヌガヤ亜群集、またはミズナラ・ツルシキミ群集(武田・植村・中西 1983)に近似する。

大正池に流入する沢(南利根別川上流)ぞいの低地から大正池池畔にかけては、ヤナギ類、ヤチ

ダモ、ハルニレ、ケヤマハンノキ、サワシバなどが多く、低木のエゾニワトコ、サワフタギなどもある。

4 森の植物の四季

この林内の歩道(図1)は、A(2時間コース、3.3 km)、B(半日コース、5.0 km)、C(一日コース、9 km)の3コースがあるが、どのコースにも長く急な坂道はない。訪れた人がゆっくりと歩を進めるうちに、さまざまな野草を見つけ、多様な樹木が季節をおって織りなす景観を愛で、野鳥や虫たちの姿や鳴き声に心を和ませて、心身をリフレッシュすることができる。このことは自然休養林、保健保安林に指定された所以でもある。

ここでは、筆者の所属する利根別自然休養林研究会のフィールドワークや、市民参加を呼びかけて開催する観察会での記録や経験をもとに、主として植物について紹介する。

4.1 早春の野草

広葉樹が葉を開く前、陽ざしの届く林床は明るい。4月中旬、雪解け直後のフクジュソウやナニワズに続き、林内の歩道の路傍やササの少ない林床および林縁には、ヒメイチゲ(写真1)、エゾエンゴサク、ネコノメソウ、ニリンソウ、フッキソウ、エンレイソウ、オオタチツボスミレ、セントウソウ、ミヤマスミレ、タニギキョウなどが開花し、また、湿地にはミズバショウが咲く(大正池奥には少ないが、休養林南部に接する金志池奥部には群落がある)。

4.2 春もみじと白い小花の季節

5月初め、枯れ木色の森にキタコブシやエゾヤマザクラの花が春を告げる。中旬にかかると、森に若葉が萌し、ウダイカンバ、シナノキ、ミズナ



写真1 春を告げるヒメイチゲ(4月末)

ラなどの若葉色にアカイタヤの赤い若葉と黄色の花、さらにエゾヤマザクラのピンクの咲き残りも配して、樹種ごとに開葉時の色の異なる落葉樹林の「春もみじ」が丘陵を暖かく彩る。この頃から6月にかけて、林床にはミヤマエンレイソウ、オオバナノエンレイソウ、ツボスミレ、ツクパネソウなどが咲き、また、ヒトリシズカ、コンロンソウ、クルマバソウ、ヤブニンジン、オククルマムグラ、マイヅルソウなど、白い小花の季節でもある。なお、この森にはカタクリ、シラネアオイは自生していない。

4.3 初夏から夏へー若葉の木陰で

6月、森は若葉が広がり(写真2)、大きくゆったりと咲くホオノキの花を見たり、地面に散り敷く白い花からハクウンボクに気づくこともある。林床は明るい樹陰となり、この頃からユウシュラン、ギンラン(クゲヌマランに類似)、トケンラン、コケイラン、サルメンエビネ、サイハイランなどのランの季節が始まり、中旬のオオハナウドの開花は夏の訪れが近いことを知らせてくれる。

4.4 夏一緑陰の植物

7月から8月にかけて、樹々の緑は濃く、林内は涼しい。時折シナノキの花の香りが漂うなか、樹幹を登るツルアジサイやイワガラミの白い花輪のような花序(花の集まり)が目に入る。林床にはチシマアザミ、オオウバユリ、ハンゴンソウ、ヨブスマソウなど丈の高い草がめだち、クルマユリ、イチヤクソウ、ウメガサソウ、そしていづれもやや稀ながら菌従属栄養植物(光合成を行わず、菌類に寄生して栄養を得る植物)のオニノヤガラ、シャクジョウソウ、また、9月にかけて赤いソーセージのような果実をつけたツチアケビを見つけることもある。夏に葉を落としたナニワズの枝に赤熟した実がかがやく。林縁にトモエソウやエゾゴマナ、池畔を彩るクサレダマ、エゾミソハギ、沢



写真2 若葉の森(6月上旬)

ぞいにはオニシモツケ、キツリフネなどが咲き、ジュウモンジシダ、リョウメンシダ、ミヤマベニシダ、コタニワタリなどのシダ植物も多い。沿道には「ひつつき虫植物」（動物などにひつついて運ばれる実をつける植物）のキンミズヒキ、ハエドクソウ、ヤブハギ、ウマノミツバ、ミズヒキ、ノブキなども多い。これらは夏に咲き、9月にかけて実る。

なお、Cコースに含まれ、この森の東縁で萩の山スキー場に近い標識18～21付近（図1）では、上記の野草のほか、春にはアズマイチゲ、夏にエゾキスゲ、カリガネソウ、ヒメハギなども見ることができる。

4.5 キノコと紅葉の森

9月はキノコの季節でもある。この森では、長谷川正義氏（利根別自然休養林研究会）によりこれまで380余種のキノコが記録されており、今後400種に達すると見られる。食用のナラタケ、ヒラタケ、タマゴタケ、アカヤマドリ、ハタケシメジ、ムキタケなどばかりではなく、有毒のオオワライタケ、テングタケ、ドクツルタケ、タマゴテングタケ、クサウラベニタケ、ニガクリタケなども観察会などに参加すれば実地に確認できる。

10月中旬、ツタウルシの葉が赤く色づく、紅葉の季節が始まる。ウダイカンバ、アズキナシ、ミズナラなどの黄色系のなかで、とりわけ鮮やかな赤色のヤマモミジ、ハウチワカエデと鮮黄色のアカイタヤが映え、広葉樹シーズンの最後を飾る。

4.6 春を待つ森

大量の積雪も2月下旬から3月上旬には比較的締まって歩きやすくなる。見通しのきく林内では、まるでドライフラワーのような枯れた花をつけたツルアジサイやイワガラミ、樹木に這い上がる常緑のツルマサキ、遠目にも鮮やかな赤い実をつけたアカミヤドリギなどが目を引く。樹幹に着生するシダ類のオシャグジデングやイワオモダカを見たり、また、雪上に落ちたアサダ、アカイタヤ、ヤマモミジ、ヤチダモ、シナノキなどの果穂（小さな果実が穂状に多数集まったもの）や実、ノリウツギの花穂（花が穂状に集まったもの）などを拾うこともできる。枝に目を凝らせば、猿の顔に似たオニグルミの葉痕（葉が落ちたあとと枝に残る模様）、とんがり帽子を被った小人の顔のように見えるハルニレの冬芽（越冬芽）と葉痕（写真3）なども面白い。このほか、枝につくスカシダワラ（透かし俵：クスサンの繭）やぶら下がるツリカマス（吊り吠：ウスタビガの繭）、雪上に残るエゾユキウサギ、エゾリス、エゾシカの足跡など、冬の



写真3 冬—「とんがり帽子の小人の顔」
（ハルニレの越冬芽と葉痕）

眠りのなかにあっても、森は生きていることを実感できる。

5 森の自然にかかわる市民の活動

5.1 観察ガイドブックの編集・刊行と市民向け観察会の開催

筆者の所属する利根別自然休養林研究会は、この森の植物、昆虫を観察・調査し、その結果を初心者向けにまとめ、7冊のガイドブックとして刊行してきた（利根別自然休養林研究会 1989, 1991, 1992, 1993, 1998, 2007a, b, 2010, 2016）。また、これらを用いてこの森で年に3～4回、市民参加の観察会を開催しており（写真4）、多くの人々に多様な植物や生きものが織りなす自然の森の豊かさを感じてもらうことを通じて、この森の保全についても意識してもらおうことを目指している。

5.2 特定外来生物オオハンゴンソウの駆除活動

周囲をすべて耕地や道路により囲まれた島状の丘陵地にあるこの森では、まわりから外来種も入り込みやすい。とくに特定外来生物オオハンゴンソウは林内歩道にそって深く侵入している。この森では2011（平成23）年から当時のNPO法人利根別の森ネットワークが主催し、岩見沢市、空知森林管理署が協力して毎夏に1回、市民参加のオオハンゴンソウ駆除を実施してきた（写真5）。この法人の解散後は利根別自然休養林研究会が引き継いで主催している。このほか、有志やボランティア団体による駆除も行われて、減少域や完全駆除域は少しずつ拡大しつつあり、今後も続けられる予定である。



写真4 ミズナラはひとかかえで樹齢百年(冬の森観察会 2013年3月3日 撮影:松下健一氏)



写真5 オオハンゴンソウ駆除作業 (2016年8月7日 撮影:松下健一氏)

5.3 岩見沢野鳥の会および探鳥会など

この森は「クマゲラの森」、あるいは「キビタキの森」などとも呼ばれ、さまざまな野鳥がここに棲息し、また飛来する(写真6)。岩見沢野鳥の会はこの森の野鳥とその生態を観察・記録し、その保護や棲息環境の保全についての提言も行ってきた。同会の若林信男氏によれば、この森を象徴する上記2種のほか、フクロウ、オオルリ、クロツグミ、カラ類など、この森で観察された野鳥は147種にのぼり、ニュウナイスズメのように減少していた野鳥が再び増えつつある例も観察されている。岩見沢野鳥の会は、例年5月に2回、6月に1回、この林内で探鳥会を実施しており、愛鳥家の市民が多数参加している。

ほ乳類ではエゾリス、キタキツネ、エゾタヌキ、エゾユキウサギなどが棲息し、近年は道内のほかの山林同様、エゾシカや時季によってはヒグマの出没がある。

5.4 その他の行事・活動など

この森には四季を通じて岩見沢市民が訪れるほか、幼稚園、小中学校、大学などの林内散策、野外活動、および野外実習の場として利用されている。市内ばかりではなく、札幌方面など市外からの団体が森と植物、きのこ、野鳥などの観察に訪れる。このほか、2016(平成28)年8月には岩見



写真6 この森は「クマゲラの森」とも呼ばれる。右は食痕(撮影:若林信男氏)

沢青年会議所主催のトレイルランの大会があり、林内歩道BコースとCコースを組み合わせた10kmおよび15kmのコースで行われ、およそ200名が参加した。

6 利根別の森の今後

多様な生きものが暮らす自然林の中で、散策しつつ、生きものとの出会いを楽しんだり、動植物について学ぶためには、この森の豊かな自然が永く保全されて行くことが前提となる。周囲の自然林から隔離されて島状の存在となったこの森では、ほかの自然林からの動植物の伝播は起こりにくい。それ故、この森の稀少な種を絶やさないうような十分な注意が必要であろう。

6.1 利根別の森の稀少植物

林床には絶滅危惧種であるサルメンエビネやスズムシソウ、ベニバナヤマシャクヤクなどがまれに見られる。北本 毅氏(利根別自然休養林研究会)により大正池奥の湿地で見出された絶滅危惧種ハイハマボス(写真7)は、後述のように池



写真7 稀少種ハイハマボス

が空になったことで湿地が乾燥し、個体数が激減した。適地への移植も試みられたが、これまでのところ成果は認められず、さらなる工夫が必要である。

6.2 大正池の損壊と復原

2010(平成22)年秋に大正池の堤体が陥没する事故があり、その後堤体は切り開かれ、池は空になった。折しもこの前年からこの池の水を利用する農家は皆無となっていたので、灌漑用水は不用となった。このような状況の中で、岩見沢市は市民や関係団体が加わるワークショップを重ねて検討し、良好な自然環境を保全しつつ自然観察や自然学習およびレクリエーションを行うことが可能となる大正池および周辺の復原をめざす方針を定めた(岩見沢市総務部秘書課広報係 2016)。

既に工事は開始されており、今から数年後、新たに堤防が築かれ、再び池と水辺が戻ってくるであろう。とくに工事後の数年間は、森の周縁部からのハリエンジュ、シンジュ(ニワウルシ)、オオハンゴンソウなどの外来種の防除に留意し、さらにその後、年月をかけて池周辺の自然の植生が周辺の森につながってゆくよう見守らねばならない。

引用文献

- 岩見沢市史編さん委員会(1963)大正池水利組合.岩見沢市史編さん委員会(編)岩見沢市史,909-910.
- 岩見沢市総務部秘書課広報係(2016)緑のシンボル.広報いわみざわ, No.878, 8-9.
- 川端清策(1963)岩見沢市の植物.岩見沢市史編さん委員会(編)岩見沢市史, 232-246.
- 菊沢喜八郎(1986)北国の雑木林.蒼樹書房, 220 p.
- 宮脇 昭(1967)北海道の低地林—ミズナラ林とカシワ林.宮脇 昭ほか(編)原色現代科学大事典3, 216-217.学習研究社.
- 武田義明・植村 滋・中西 哲(1983)北海道のミズナラ林について.神戸大学教育学部研究集録, 71, 105-122.
- 利根別自然休養林研究会(編)(1989)とねべつ自然休養林観察ガイドブック1 展望台コース 春～初夏の野草編.利根別自然休養林研究会, 26 p.
- 利根別自然休養林研究会(編)(1991)とねべつ自然休養林観察ガイドブック2 展望台コース 夏～秋の野草編.利根別自然休養林研究会, 45 p.
- 利根別自然休養林研究会(編)(1992)とねべつ自然休養林観察ガイドブック3 展望台コース 樹木編.利根別自然休養林研究会, 81 p.
- 利根別自然休養林研究会(編)(1993)とねべつ自然休養林観察ガイドブック4 キノコ編.利根別自然休養林研究会, 94 p.
- 利根別自然休養林研究会(編)(1998)とねべつ自然休養林観察ガイドブック5 昆虫編.利根別自然休養

林研究会, 110 p.

- 利根別自然休養林研究会(編)(2007a)とねべつ自然休養林観察ガイドブック1 展望台コース 春～初夏の野草編(改訂版).NPO法人利根別の森ネットワーク, 98 p.
- 利根別自然休養林研究会(編)(2007b)とねべつ自然休養林観察ガイドブック6 シダ植物編.利根別自然休養林研究会, 113 p.
- 利根別自然休養林研究会(編)(2010)とねべつ自然休養林観察ガイドブック3 樹木編.増補版 NPO法人利根別の森ネットワーク, 107 p.
- 利根別自然休養林研究会(編)(2016)とねべつ自然休養林観察ガイドブック7 イネ科植物編.利根別自然休養林研究会, 165 p.
- 植村 滋(1993)北海道の森と植物.東 正剛・阿部 永・辻井達一(編)生態学からみた北海道, 25-39, 北海道大学図書刊行会.

利根別の森へのアクセス

1. 交通手段

①中央バス岩見沢ターミナルから路線バスを利用する

JRを利用する人はこの手段がよい。岩見沢駅前南側のコミュニティプラザビル内にある中央バスターミナルから緑が丘・鉄北循環線で「緑が丘6丁目」行き、または「グリーンランド」行きに、あるいは、万字線で「毛陽交流センター」行きに乗り、「大正池入口」で下車。バス停から少し戻って右折、途中からごく緩やかな上り道となり、高速道にかかるキジ橋を渡れば自然休養林入口。バス下車後、徒歩約10分。

②車で国道12号を経由する

国道12号と駅前通りとの交差点信号「9条西5」で東(教育大学方向)へ曲がる(札幌方面からは右折)。直進し、突き当りの教育大学岩見沢校前の信号で右折、間もなく「利根別原生林」の標識で左折直進し、高速道にかかるキジ橋を渡ると、休養林入口の駐車場がある。

③車で道央自動車道を経由する

岩見沢インターチェンジで高速道から国道234号に入り、北進(駒園、美園、岩見沢市街方向)。国道に出て2番目の信号(美園8丁目)を右折、1km弱直進し、信号を右折、間もなく「利根別原生林」の標識で左折直進し、高速道にかかるキジ橋を渡ると、休養林入口の駐車場がある。

2. 森の情報の入手

〒068-0835 岩見沢市緑が丘73-2

電話 0126-32-2488

利根別原生林ウォーキングセンター

利根別自然休養林入口から左斜め上にあるログハウス。林内や歩道コースの状況、催し、生きものやヒグマに関する情報などが得られ、ウォーキングマップも入手できる(無料)。休憩可。開館期間は4月21日から10月31日まで。通常は月曜休館。

なお、金志池周辺のCコースと、標識25から東に向かう歩道(図1)は損壊などのため現在通行困難な部分があるので要注意。

芳賀 卓(はが まさる)

1941年生まれ。北大理学部植物学科卒、同大学院博士課程単位取得退学。北海道教育大学名誉教授。利根別自然休養林研究会代表。岩見沢市在住。